

研究ノート

蓄藏貨幣論

小林 威雄

本稿は、蓄藏貨幣機能が、金の代理者によってはたすことができるかどうかという問題を中心として取扱ひ、この問題の研究のために生じてくる蓄藏貨幣に関する若干の諸問題を提起しそれらをあきらかにしようとするものである。

いままですべて具体的に問題として提起され、論議がなされているのは、紙幣化せる不換銀行券が国内的流通において「一般的流通手段」として機能している場合、蓄藏貨幣がいかなる存在形態のもとにあるかという問題である。この問題に関する見解には一つには岡橋保教授の、紙幣の蓄藏は蓄藏貨幣とはなりえず蓄藏貨幣機能をいとなむことができるのは「正貨」ほんらいの貨幣（金または銀）のみである、という見解があり（岡橋保著『信用貨幣の基礎理論』参照）、一つには竹村脩一氏の、紙幣

の蓄藏は新しい蓄藏貨幣の形態である、という見解がある（竹村脩一氏論文「蓄藏貨幣の形態」九大『経済学研究』第一八巻第一号、参照）。

したがってわれわれの問題の研究も最終においてこの問題を取扱わねばならぬ。

二

周知のごとく、マルクスは、『資本論』第一巻第一篇第三章および『経済学批判』第二章において、単純な商品流通の領域内における貨幣を考察している。まず第一節において（『資本論』『経済学批判』ともに同様である）価値の尺度としての貨幣を論じ、つぎに第二節において流通手段としての貨幣をあきらかにし、最後に第三節において「貨幣としての貨幣」が論述されている。第三節は、(a)、(b)、(c)とわけて貨幣蓄藏、支払手段、世界貨幣が論ぜられている。これら貨幣蓄藏、支払手段、世界貨幣としての貨幣としての諸機能は、価値尺度、流通手段についての論述のごとく各々節にあらためることなく「貨幣」という表題のもとに一括され(a)、(b)、(c)とわけて考察されているわけである。

『資本論』と『経済学批判』とは、その敘述の内容においては相異があるが、しかし大系的構成はいまみたごとく同一である。そしてこの大系的構成、敘述の順序は、論理的であるととも歴史的発展にも沿っているのである。（註）

(註) 「マルクスは、貨幣の相異なる諸機能を非常にくわしく分析しているのであるが、その分析のところでは、抽象的な時としては外見的には、純演繹的な・叙述形態が、實は、交換過程および商品生産の發展史のための尨大な事實材料を再生産しているのだ、ということを突きとめることがこ

こでも(總じて『資本論』の初めの諸章におけると同じように)特に重要なことである」(レーニン「カール・マルクス」『資本論』インステイテュート版前文S.44、邦譯、青木文庫版、長谷部譯(1)四七ページ)。

『資本論』と『経済学批判』との関係について、『資本論』第一版への序言の中でマルクス自身がのべているごとく、両書は相互に補充せられあっているものであり、この両書においてマルクスの貨幣論が成り立っているのである。(註)

(註) 「私が第一巻を公衆におくろうとするこの著作は、一八五九年に公けにされた私の著述『經濟学批判』の續きをなす。初めと續きとのあいだの長い休みは、私の仕事を度かさねて中斷した長年にわたる病気のせいである。

かの以前の著述の内容は、この巻の第一章に概括されてゐる。それは連絡と完全とのためばかりではない。叙述が改善されている。事情が何とか許したかぎりには、以前にはただ暗示されただけの多くの点がここでは詳しく展開されたこと開され、他方では逆に、かここでは詳しく展開されたことがここでは暗示されるにとどまっている。価値理論および

貨幣理論の歴史にかんする諸節はいまや当然に全部なくなくなっている。とはいえ以前の著述の讀者は第一章への註において、かの理論の歴史のための新たな典據が示されていることを見出すであろう」。

「*『資本論』第一巻の初版では、全体が六章に分れてゐた。第二版では章が編に改められ、第五章は二編に分れた。かくして初版における第一章は、第二版以後では第一編全部に相当する。…譯者」(『資本論』インステイテュート版S.5、邦譯、青木文庫版、長谷部譯(1)六九ページ、以下「資本論』はインステイテュート版、邦譯は青木文庫版長谷部譯による)。

蓄藏貨幣についての考察は、上述のごとく、第三節の(a)で取扱われているのであるから、まず第三節でいかなる貨幣が考察されているのか、ということの理解からはじめねばならぬであろう。そしてこの問題は、また、なぜ蓄藏貨幣、支払手段、世界貨幣といふあいことなる形態規定にもとづく貨幣の諸機能が第三節で「貨幣」といふ表題の一つの節において論述されるのか、という問題とも関連している。

第三節で考察されている貨幣は「貨幣としての貨幣」である。それは流通手段としての貨幣ではなくして、流通手段と區別しての貨幣である。このような貨幣は、G—W—Gすなわち商品と貨幣と交換するために貨幣を商品と交換する、という形態における流通過程の出発点をなしている。このG—W—Gと

いう流通形態は、貨幣と商品という形態のもとに、よりいっそう發展した生産諸關係、すなわち資本としての貨幣という形態規定をうけている。しかしながら、単純な商品流通の領域内においては、このような、よりいっそう發展した生産諸關係、資本としての貨幣という形態規定を取扱うことはできない。だから単純な商品流通の領域内においては、 $G \rightarrow W \rightarrow G$ という流通形態を、ただ $W \rightarrow G \rightarrow W$ という流通形態に対して、単により高度の運動の反映であるにすぎない流通形態として把握するのである。したがって、流通手段と区別された貨幣の考察は、商品流通の直接的形態である $W \rightarrow G \rightarrow W$ から展開される。

貨幣は、 $W \rightarrow G \rightarrow W$ という流通のなから必然的に發生してくる。だから貨幣は、 $W \rightarrow G \rightarrow W$ という流通の結果である。 $W \rightarrow G \rightarrow W$ という流通のなかでは貨幣は、価値の尺度として機能し、流通手段として機能する。したがって $W \rightarrow G \rightarrow W$ という流通のなかで価値の尺度として、また流通手段として役立っている独自の商品は、それ以上社会のたすけをまたないでも貨幣である。マルクスのいうように「価値尺度と流通手段との統一が貨幣である」(『經濟學批判』インスティテュート版 S. 116, 邦譯大月書店、マルクス・エンゲルス選集補卷(3)一三九ページ、「以下『經濟學批判』はインスティテュート版、邦譯は大月書店刊マルクス・エンゲルス選集補卷(3)による」)。

ところで、このように価値尺度と流通手段の統一として貨幣となった独自の商品、金は、さらに価値尺度、流通手段という

二つの機能とは、ことなつた諸機能をはたす。マルクスは、つぎのごとくいっている。「だがこのような統一としては、金は、さらにこれら二つの機能でのその存在とはことなつた独立した実存をもつ」(『經濟學批判』S. 116, 邦譯、同上 一三九ページ、以上のところ『經濟學批判』S. 115~116, 邦譯、同上 一三七~一三九ページ、参照)と。

第三節では、この「価値尺度と流通手段との統一として」貨幣となつた独自の商品、金がかかる貨幣としての存在においてどのような諸機能をはたすか、ということが考察されているのである。そしてその考察は、 $W \rightarrow G \rightarrow W$ という商品流通の直接的形態から展開されて、まず $W \rightarrow G$ から $G \rightarrow W$ への移行の中断、いいかえれば商品の姿態変換の中断によって G が流通から引きあげられることから(a)で「貨幣蓄藏」(Schatzbildung)を、ついで $W \rightarrow G$ の時間的分離、いいかえれば商品の讓渡とそれの価格の実現との時間的分離から(b)で「支払手段」(Zahlungsmittel)を、そして最後に国内的流通からあゆみでて國際的流通への發展にとまらう「世界貨幣」(Weltgeld)を(c)で論じ、かかる順序において考察がすすめられているのである。

そこでなぜ蓄藏貨幣、支払手段、世界貨幣というあいことなる諸機能が「貨幣」という表題のもとで各々節にあらためられることなく、ただ(a),(b),(c)とにわけられて論述されるかという問題は、あきらかになるであらう。それはつまり蓄

藏貨幣、支払手段、世界貨幣は、それぞれあいことなる形態規定にもとずいており、それぞれあいことなる諸機能ではあるが、しかし、これら三つの機能は、いずれも「価値尺度と流通手段との統一」として「貨幣となった金が、かかる貨幣としての存在においてはその機能であるからにはかならない。だからこの点にもとずいて蓄藏貨幣、支払手段、世界貨幣の三つの機能が、第三節「貨幣」という表題のもとに、節にあらためることなく単に(a)(b)(c)とにわけられて論述されているのである。さて「価値尺度と流通手段との統一」として「貨幣となった商品、金が、貨幣として機能するのは、いかなる場合であろうか。

マルクスは、『資本論』の第三節において(a)貨幣蓄藏に入る前に、短文ではあるが、つぎのごとくいっている。このパラグラフは、版によってことになっており、また問題点でもあるので原文にもふれておこうと思う。

ミンゲルス版、インステイテネット版

Die Ware, welche als Wertmaß und daher auch, laiblich oder durch Stellvertreter, als Zirkulationsmittel funktioniert, ist Geld. Gold (resp. Silber) ist daher Geld. Als Geld funktioniert es, einerseits wo es in seiner goldenen (resp. silbernen) Leiblichkeit erscheinen muß, daher als Geldware, also weder bloß ideal, wie im Wertmaß, noch repräsentationsfähig, wie im Zirkulationsmittel; andererseits wo seine

Funktion, ob es selbe nun in eigener Person oder durch Stellvertreter vollziehe, es als alleinige Wertgestalt oder allein adäquates Dasein des Tauschwertes allen andren Waren als bloßen Gebrauchswerten gegenüber fixiert.

「価値尺度として機能し、したがってまた自身で、または代理者によって流通手段として機能する商品は、貨幣である。だから金(または銀)は貨幣である。金が貨幣として機能するのは、一方では、それが、その金の(または銀の)現身で、それゆえに貨幣商品として——つまり価値尺度におけるごとく単に觀念的にでもなく、また流通手段におけるごとく代表可能のにもなく——現われねばならぬ場合であり、他方では、金の機能が——この機能が金自身によって果たされるか代理者によって果たされるかを問わず——金をば、唯一的な価値姿態・あるいは交換価値の唯一十全な定在・として、単なる使用価値としての他のすべての商品に対して固定させる場合である」(『資本論』第一卷S. 135, 邦譯、同上(1)二五七~八ページ)。(註)

高島譯

「価値尺度として作用するところの商品、換言すればそれ自身の現物体を以てするかまたは代用物を通して、流通要件たる機能を盡すところの商品は、即ち貨幣であるということになる。したがって金(または銀)は貨幣である。金(または銀)は一方に、それ自身の黄金(または白金)

の現身を以って現れねばならぬとき、換言すれば、価値尺度における如く單なる観念的のものでもなく、また流通要件における如く他の物に依つて代理せられるものでもなく、専ら貨幣商品として現れねばならぬとき、貨幣として作用する。他方にまた、それは、みづからその機能を盡すにしろ、或は代理物を以ってこれを盡さしめるにしろ、とに角この機能に依つて專一的の価値形態となり、換言すれば交換価値の唯一の適當な存在となつて、かかる資格を以って單なる使用価値としての他の凡ゆる商品に對立するとき、貨幣として作用することになるのである」(改造社版、九九ページ)。

向坂譯

「価値尺度として、従つてまた身みずから、或は代理者を通じて、流通手段として機能する商品は、貨幣である。金(場合によっては銀)は従つて貨幣である。金が貨幣として機能するのは、一方において、その金製の(場合によっては銀製の)肉体性をもつて現われなければならぬ、従つて、貨幣商品として、それゆえに單に価値尺度におけるように観念的にでもなく、流通手段におけるように、代理能力をもつてするわけにもいかないという場合である。他方において、金自身がいまや自分の身をもつて行ふか、代理人を通じて行ふか、いずれにしても、彼の機能が、金を唯一の価値態容として、又は交換価値の唯一の妥當なる存

在として、單なる使用価値としての他の一切の商品に對して、固定するという場合とである」(岩波文庫版、第一分冊二四七―八ページ)。

宮川譯

「価値尺度として機能し、それゆえにまた、あるいは身をもつてあるいは代理者により・流通手段として機能する商品は、貨幣である。それゆえに金(または銀)は貨幣である。金(または銀)が貨幣として機能するのは、一方においては、価値尺度における如く單に観念的なものとしてでなく、また流通手段における如く他によつて代理せられるものとしてでもなく、その肉体のままで、従つて貨幣商品として、現われざるを得ない場合であり、他方においては金(または銀)は、或いは自分の身体で或いは代理者によつてその機能を果すが、その機能のためには金(または銀)が單なる使用価値としての總ての他の諸商品に對して、唯一の価値の姿または交換価値の唯一の全適當な存在として、固定せしめられる場合である」(研進社版、二一八ページ)。

マルクスが校閲したフランス語版では、この文章全体が「つぎのごとく敘述されている。

「これまで吾々は、貴金屬を価値尺度および流通手段という二重の方面から考察してきた。貴金屬は、第一の機能を観念的貨幣として果たし、第二の機能においては諸々の象徴によつて

代理せられる。ところが、貴金屬が諸商品の實在的等価としてあるいは貨幣商品として、その金屬的現身で現われねばならぬような諸々の機能がある。なほに貴金屬が自身でも代用物によつても果たすことができるが、しかしそこでは貴金屬がつねに諸商品の価値の唯一十全な化身としての普通の諸商品の前に立つような機能もある。すべてこれらの場合においては、吾々は、貴金屬は価値尺度または鑄貨というその機能に對立して、*monnaie* あるいは適切にいえば *argent* として機能する、といふ」(『資本論』邦譯、同上(1)二五八ページ)。

またフランス語版によるところが多かつたカウツキー版では、この文章全体が、そのごとく書をあらためられてゐる。

Bisher haben wir das Edelmetall in seiner doppelten Eigenschaft betrachtet, als Wertmaß und als Zirkulationsmittel. Die erstere Funktion erfüllt es als ideales, vor-gestelltes Geld, in der zweiten kann es durch Geldzeichen ersetzt werden. Aber es gibt Funktionen, in denen es in seiner goldenen (respektive silbernen) Leihlichkeit erscheinen muß, daher als Geldware, also weder bloß ideal, wie im Wertmaß, noch vertretungsfähig, wie im Zirkulationsmittel. Andererseits gibt es eine Funktion, die es entweder in eigener Person oder durch Stellvertreter vollziehen kann, wo es allen andern Waren als bloßen Gebrauchswerten gegenüber als allein adäquates Dasein

ihres Tauschwertes oder alleinige Wertgestalt auftritt. In allen diesen Fällen sagen wir, daß es als Geld im eigentlichen Sinne fungiert im Gegensatz zu seinen Funktionen als Wertmaß und als Münze. (『資本論』カウツキー版、S. 88, 一九二一年)

「これまで吾々は、貴金屬を、その二重の性質において価値尺度としておよび流通手段として、考察してきた。貴金屬は、第一の機能をば觀念的な・觀念されたる貨幣として果たし、第二の機能においては、貨幣章標によつて代位せられる。しかるにかかる機能の外に、なお貴金屬が、かの価値尺度におけるごとく単に觀念的なものとしてでもなく、また流通手段におけるごとく他によつて代理せられるものとしてでもなく、その金(ないし銀)の肉体のままで、したがって貨幣商品として現われざるをえなくところの、若干の諸機能がある。他方には、また貴金屬があるいは自分のからだで、あるいは代理者によつてこれを果たしつつあるとしても、しかしそこでは貴金屬が、単なる使用価値として他の諸商品に對して、それら商品の交換価値の唯一の適當なる定在または独占的なる価値の姿として登場するところの、一つの機能がある。吾々は、これらすべての場合において、貴金屬が価値尺度としての・および鑄貨としての・その機能に對立して、固有の意味における貨幣として機能する、といふのである」(河上肇、宮川實共譯、岩波文庫版、第二分冊二一四〜五ページ)。

マルクスは、ここで「価値尺度と流通手段との統一として」貨幣となった商品、金が、貨幣として機能する二つの場合をのべている。まず第一の場合は、価値尺度におけるごとく単に観念的でもなく、また流通手段におけるごとく代表可能的、あるいは代理可能的でもなく、具体的に存在する金の現身で現われなければならない場合である。したがってかかる金の貨幣としての機能は、金の現身においてのみはたすことができるのであって、この場合に属する貨幣としての機能には、つねに金の現身が要求されているわけである。このような場合の貨幣としての機能を、われわれは世界貨幣において、はっきりつかむことができるであらう。

つきに第二の場合であるが、この第二の場合についてのべている文章は、非常に難解である。(註)

(註) 雑誌『評論』九一七号(河出書房)に連載され、後に単行本として刊行された、向坂逸郎、宇野弘藏編『資本論研究』(河出書房上、下、昭和二三年・二四年)の中で、大内兵衛、向坂逸郎兩大家が、この文章全体について、「大体この文章の意味がちっとも分らない」(大内教授)「何回讀んでも、何か一枚皮を隔てているような気がする」(向坂教授)と述懐されている程難かしい文章である。

フランス語版、カウツキー版は、比較的わかりやすくなるべられているので、これらを参考にしてエンゲルス版、インスティテュート版を分析してみよう。

蓄藏貨幣論

そこで第二の場合に、二つの問題がある。そのうち第一の問題点は、*„seine Funktion“* の意味である。本文、あるいは註で二三の翻譯を記しておいたが、この *„seine Funktion“* を長谷部訳では「金の機能」と意識せられており、高島訳、向坂訳では、それぞれ直訳されて「その機能」「彼の機能」となっている。*„seine“* が何をさすのかを考えてみると、金であることにはまちがいがいがないであらう。だがしかし「金の機能」といっても、決して価値尺度としての金の機能でもなく、また流通手段としての機能でもない。もし、かりにこの「金の機能」が価値尺度としての金の機能であるとするならば、*„seine Funktion“* 以下の文章「すなわち *„ob es selbe nun in eigener Person oder durch Stellvertreter vollziehe“*」(「)の機能が金自身によつてはたされるか代理者によつてはたされるかを問わず」といっていることと衝突してしまふ。なぜなら価値尺度機能が代理者によつてもはたされるということになつてしまふからである。また、流通手段としての「金の機能」とすることもできない。なぜなら流通手段機能は、金をば「唯一的な価値姿態・あるいは交換価値の唯一十全な定在・として単なる使用価値としての他のすべての商品に対して固定させ」ないからである。

ここで *„seine Funktion“* といっている意味は、金の価値尺度としての機能でもなく、また流通手段としての機能でもない金の機能である。したがって金の貨幣としての機能のことである。

ある。(註)

(註) 猪俣津南雄著『金の經濟學』中央公論社、昭和七年、参照。著者はつぎのごとく述べている。

「そこでマルクスは言う、——金は、『みづからその「価値尺度」及び流通手段たる」機能を営むにせよ、また代理者にそれを営ませるにせよ、とにかくこの機能によって專一的の価値形態となり、言い換えれば交換価値の唯一の適當な存在となり、そうした資格をもって、單なる使用価値としての他のあらゆる商品に対立する時、貨幣として作用することになる」(一六七ページ)と。

著者は、第一に、“seine Funktion”の意味を理解されていなかった。第二に、著者は、“seine Funktion”を価値尺度および流通手段たる機能と解釋され後の文章と何らの矛盾をも感じなかったということから価値尺度機能および流通手段機能を正しく理解されていなかった。「」内の挿入語は、まったく的はずれであつた。

第二の問題点は、ここでいっているの“Stellvertreter”の意味である。金の貨幣としての諸機能を初歩的に理解するには、金が貨幣として機能する第二の場合の、代理者でも機能することができるといふことを一応捨象して、金の現身においてのみ考察することが適切であるかも知れない。(註)

(註) 『資本論』の全体系にわたる研究書として、廣く讀まれているローゼンベルグの『資本論註解』では、金が貨幣と

して機能する第二の場合の、代理者でも機能することができるといふことにはふれずにつぎのごとくいっている。

「この見出しのもとで研究されているのは、貨幣が——マルクスの表現によれば——『金の現身』のまま現われる場合、したがって、たんに観念的なものとしては現われず、価値章標によって代位されえない場合の諸機能である。この点で、これらの諸機能は、いまままで考察してきたところのものとは異っている」(梅村譯、第七書房、第一分冊二二二ページ)と。

しかし、マルクス自身はつきり金の現身によってのみならずその代理者によつても機能しうる貨幣としての機能があると述べているのであるから、より深めて考察してみなければならぬであらう。

そこで、ここでいっている“Stellvertreter”の意味であるが、その意味は、このプログラフのはじめにも出ている“leiblich oder durch Stellvertreter als Zirkulationsmittel funktioniert”における“Stellvertreter”とは本質的にちがっている。ここにおける“Stellvertreter”は、流通手段として機能する金の代理者ではない。流通手段としての金の代理者は、それ自身純粹に象徴的なものであるが、これに対して、ここで代理者は單なる象徴的な存在ではない。第一に問題として取上げた“seine Funktion”の意味は、さきにも述べたごとく、価値尺度としての、また流通手段としての金の機能でもない金の

機能、すなわち金の貨幣としての機能である。この貨幣として機能する金を代理するものがこの代理者なのである。したがってここでの代理者は、貨幣として機能する金の代理者である。

ところで第二の場合において金が貨幣として機能するという、その貨幣としての機能とは、「貴金属がつねに諸商品の価値の唯一十全な化身として普通の諸商品の前に立つような」機能である。だから第二の場合において、金が貨幣として機能するということは、金が「交換価値の唯一十全な存在」として機能するということである。そして第二の場合の金の貨幣としての機能は、金自身によってでも、またその代理者によってでもはたすことができるのである。この代理者は、いままたごとく貨幣として機能する金の代理者である。だからここでの代理者は、貨幣として機能する。そして、第二の場合の金の貨幣としての機能は「交換価値の唯一十全な存在」としての機能であるから、この代理者は、「交換価値の唯一十全な存在」として機能する。そこであらためて、つぎの問題がでてくる。

では、なぜ代理者がこのように金のかわりに「交換価値の唯一十全な存在」として機能することができるのであろうか。この問題は、金と代理者との代理関係を考察することによって解明されるであろう。

金と、ここでの代理者との代理関係は、決して流通手段の代理者のごとく象徴的な関係ではない。金とここでの代理者との

代理関係は、直接的、具体的な代理関係である。すなわちここでの代理者は、金と直接に結びついており、代理者は、いつでも金と引換えることができるのである。金と引換えることができるからこそ、ここでの代理者は、「交換価値の唯一十全な存在」として機能することができる。金と同様にみなすことができるのである。したがって、このような金と代理者とのあいだに金と引換えることができるという関係がない代理者は、貨幣として、「交換価値の唯一十全な存在」として機能することはできない。またこのような金と代理者との関係がなくなれば、代理者は、「交換価値の唯一十全な存在」として機能することはできなくなる。そのような場合には金の現身が現われなければならないのである。

ここで注意すべきことは、代理者が、「交換価値の唯一十全な存在」として機能しうるということから、代理者自身が、あたかも「交換価値の唯一十全な存在」たりうるかのごとく理解してはならないということである。

金の代理者が、「交換価値の唯一十全な存在」として機能しうるのは、いままたごとくその代理者をもって金と引換えることができるという関係が実存するからにはかならない。金が「交換価値の唯一十全な存在」として機能するのを、金と引換えることができる代理者が金のかわりに「交換価値の唯一十全な存在」として機能するのである。「交換価値の唯一十全な存在」たりうるのは、貨幣商品たる金のみであってそれ以外のも

のでは決してない。

要するに、ここでの代理者は、象徴的な流通手段の代理者とは、本質的にことなり、金と直接的に結びついており、金といつても引換えることができるという代理関係にもとずいている代理者なのである。この第二の場合に属する貨幣としての機能と、われわれは支払手段においてみる事ができよう。

さて、以上『資本論』の第三節において、(a) 貨幣蓄藏に入る前の文章を吟味してみた。要するに、マルクスは、金が貨幣として機能するのは二つの場合であるということを示しているのである。そして以下 (a)、(b)、(c) で貨幣蓄藏、支払手段、世界貨幣という貨幣としての諸機能を論ずるのである。

ここで、つぎのような問題がでてくる。すなわちこの三つの機能のうちどの機能が第一の場合、すなわち金の現身で現われねばならぬ機能なのか、またどの機能が、第二の場合、すなわち金の現身でも、あるいはその代理者でもはたされうる機能なのかという問題である。

この問題について注目すべきは、フランス語版とカウツキー版である。フランス語版とカウツキー版では、金が貨幣として機能する第一の場合、すなわち金の現身で現われねばならない場合には、それぞれ長谷部訳、河上、宮川共訳にみられるごとく「諸々の機能」「若干の諸機能」「カウツキー版では、"s'agit Funktionen"）となつており複数になっている。他方、金が貨幣として機能する第二の場合、すなわち金の現身でも、ある

いは金の代理者でも機能しうる場合には、「一の機能」(カウツキー版では "es gibt eine Funktion") となつており、単数になっている。

そこで (a)、(b)、(c) と「貨幣蓄藏」「支払手段」「世界貨幣」と概観してみると、貨幣蓄藏者を「金という物神に彼の肉体的快樂を犠牲とする。彼は禁欲の福音を信奉する」(『資本論』第一卷、S. 139, 邦譯、同上(1) 二六三ページ) とマルクスが、皮肉ついているところからもわかるように貨幣蓄藏は、金の現身で現われねばならぬ第一の場合の機能に属し、(註1) つぎに金の代理者としての信用貨幣は(この信用貨幣とは広義の信用貨幣の意味であつて、「本来の商業貨幣」(『資本論』第三卷、S. 324, 邦譯、同上(1) 四六四ページ) 〓手形である)「販売された諸商品にたいする債務証書そのものが債権を移転するために再び流通することによって、支払手段としての貨幣の機能から直接的に發生する」(『資本論』第一卷、S. 145, 邦譯、同上(1) 二七二ページ) のであるから支払手段は第二の場合の機能に属し、最後に世界貨幣は、「つねに現実的貨幣商品たる生身の金が必要とされている」(註2) (『資本論』第一卷、S. 156, 邦譯、同上(1) 二八〇ページ) のであるから当然第一の場合の機能に属する。したがつて第一の場合に属する機能は、貨幣蓄藏、世界貨幣という二つの機能となり、複数になり、第二の場合に属する機能は、支払手段という唯一の機能となる。そうするとフランス語版、カウツキー版でのべられていること

と一致する。

(註1) 河上隆著『資本論入門』(世界評論社版、第二分冊)

「金が自分自身のからだで管まねばならぬ機能の第一は、蓄藏貨幣としての機能(価値の蓄藏者としての機能)である」(二八三ページ、傍点―著者)。

(註2) また『資本論』第三卷第五篇第二八章でつぎのごとく記している。「この目的(世界貨幣―引用者)のためには、貨幣はつねに蓄藏貨幣としての形態で金屬的具体性をとって、価値の形態たるにとどまらず、自身価値に等しい―価値の貨幣形態である蓄藏貨幣―形態で実存せねばならぬ」(S. 494、邦譯、同上(四六四三―四ページ))と。ところで、この問題に対してつぎのような意見がある。

「この節で論ぜられている諸機能のうちどの機能が金自身によつてではなく代理者によつて果たされるか、金がその現身で現われねばならぬ機能はどれか、という問題がある。だがこれは、金がそれらの機能を果たすさいの諸条件によつてこととなり、一様にはいえないのであって、国内での貨幣関係が發達をとげ、かつまた正常的に行われているさいには、いずれも代理者によつて果たすことができる。したがつてまた世界貨幣たる役割においては、つねに金の現身が必要とされる」(講座『資本論解明』第二分冊二五ページ、理論社)。

また「支払手段としては、貨幣は、単に流通を媒介するだけの手段としてではなく、一般的等価物の休止の定在として、絶

対的商品として、つまり貨幣として流通にはいるのであります。またはその代理者を流通にはいらせるのであります。なお貨幣の退藏が金そのものではなく流通手段として金の機能を代行する通貨によつて代位されるのではないか、これは考へてみるべき問題であらうと思ひます」(向坂、宇野編『資本論研究』二〇二ページ)。(註)

(註) なおこれらのほかに竹村脩一氏の論文「蓄藏貨幣の形態」(九大『経済学研究』第一八卷第一号)があげられる。支払手段としての機能が、代理者によつても機能することができるという点においては異論がないとして、蓄藏貨幣の機能も代理者によつてはたされうるとなれば、フランス語版、カウツキー版においてのべられたこととくいちががってくる。そして蓄藏貨幣の機能は、代理者によつてもはたすことができるという意見(もちろん反対の意見もあるが(註1))があり、またマルクスも第三卷において暗示的ではあるが、代理者による蓄藏貨幣機能をしめしている(註2)、蓄藏貨幣の考察をいっそう深めてみる必要があるであらう。

(註1) 岡橋保著『貨幣論』春秋社、昭和二四年)『信用貨幣の基礎理論』創元社、昭和二四年)

(註2) マルクスが、暗示的に蓄藏貨幣の機能が金の代理者によつてでもはたされうるとのべているのはつぎの文章である。「銀行の準備金は資本制的生産の發展した諸國では、平均的にはつねに蓄藏貨幣として現存する貨幣の大いさを

表現するのであって、この蓄藏貨幣の一部分は、それ自身ふたたび自己価値でない證券—金の單なる支拂指圖書—から成り立つ」(『資本論』第三卷第五篇第二九章、S. 513, 邦譯、同上(1)六六五ページ、傍點—引用者)。

そこで節をあらためて、蓄藏貨幣の形態規定を考察してみることにする。

三

W—G—Wにおいて、W—GにつづいてG—Wが補足されるかぎり、Gの貨幣としての定在は一時的、暫時的な貨幣形態であつて、それは流通手段である。金が貨幣としての定在をうけとるのは、金が非流通手段として流通手段から分離することによつてである。だから貨幣としての金の独立は、なによりもまず商品の姿態変換の中断、W—GとG—Wの分離がなければならぬ。商品の姿態変換の中断によつて金鑄貨は貨幣に転形される。だがこの貨幣をもつてただちに蓄藏貨幣とみなすことはできない。マルクスが「姿態変換系列が中断され、販売がそれにつづく購買によつて補足されなくなるや否や、貨幣は不動化される、—あるいは、ポアギューベールがいうように可動なものから不動なものに、鑄貨から貨幣に、転形される」(『資本論』第一卷S. 135, 邦譯、同上(1)二五八—九ページ、なお河上著『資本論入門』、第二分冊二八三ページ、および竹村氏論文、同上九四ページ、参照)といつている時の鑄貨から貨幣へ

の転形は、流通手段から分離して貨幣に転化したといつておいては、いつているにすぎない。(註)

(註) 向坂、宇野編『資本論研究』

「貨幣になるところと、退藏貨幣になるところとはむろん違ふ。鑄貨は流通を中断されれば貨幣になる。しかしそれはすぐに退藏貨幣になつたというわけではない。別のところで『停止状態にある鑄貨と退藏貨幣』という二つの形態云々と述べて、両者が一應區別されているのもそのためでしょう。しかし一旦、貨幣に轉化すれば、それは自己目的たり得る地盤が出来たのだから、『停止状態』を永くつづけて退藏貨幣に更に轉化するものも出てくるだろうと思ひます」(二〇六ページ)。

マルクスが、ここでいつている鑄貨は、金鑄貨であつて、それは、單なる流通手段としての機能をはたさず貨幣を示している。(『資本論』第二卷S. 345, 邦譯、同上(6)四五一—二ページ、参照)

流通手段からはなれた貨幣は、一つは「鑄貨準備」の形態をとつて、他は蓄藏貨幣形態をとる。ところが「鑄貨準備」については、『経済学批判』においては、第二章第三節(a)で取扱われているが、『資本論』の第一卷第一篇第三章第三節(a)では取扱われていない。しかし『資本論』においても第二卷第二篇第一章においては、『経済学批判』から引用し、本文にとりあげられており、また第二卷第二篇第八章においても、「鑄

「貨準備」とはいつていないが、同様にこの範疇についてのべている。(註)『資本論』第二卷第二篇第十七章、S. 346, 邦譯、同上(6)四五〇〜四五二ページ、参照)

(註)「第一部(第三章第三節(a))で明らかにされたように、一社會に現存する貨幣の一部分が流通手段・または直接流通貨幣の直接的準備金・として機能するとき、他の一部分はつねに蓄藏貨幣として遊休するものとすれば、貨幣の總分量が蓄藏貨幣と流通手段とに配分される比率がたえず變動する。云々」(『資本論』第二卷第二篇第八章、S. 177, 邦譯、同上(6)二三三〜四二ページ、傍点引用者)。

「蓄藏貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」(『經濟學批判』S. 131, 邦譯、同上(一五七ページ)と『經濟學批判』でのべていふ)なせ『資本論』の第一卷第一篇第三章第三節(a)で取扱われなかつたのかというその理由はわからぬ。だが前節でみたごとく『資本論』と『經濟學批判』との關係についてマルクスの言葉の意にしたがうとすれば、『資本論』第一卷第一篇第三章第三節(a)において取扱われていないからといって「鑄貨準備」の形態を無視することはできないであろう。そこでまず「鑄貨準備」としての貨幣をみよう。

「流通手段の貨幣へのこの最初の転化は、貨幣流通自体の単に技術的な一契機をあらわしているにすぎない」(『經濟學批判』S. 116, 邦譯、同上(一四二ページ))。

流通手段の貨幣への最初の転化、それは貨幣流通そのものの

単に「技術的な一契機」をあらわしているにすぎない、といわれているのが「鑄貨準備」である。したがって「鑄貨準備」は、流通手段から貨幣への転化の最初の形態である。

マルクスが「鑄貨準備」とよんでいる流通手段と區別しての貨幣の一つの形態とは、つぎのようなものである。「流通W—G—Wでは、第二環G—Wは、同時にはおこなわれないで時間的にあいついでおこなわれる一系列の購買に分裂するのであるから、Gの一部分は鑄貨として流通するのに、他の部分は貨幣として休息する」(『經濟學批判』S. 119, 邦譯、同上(一四二ページ))。

貨幣として休息している鑄貨、これが「鑄貨準備」(Münzreserve)(『經濟學批判』S. 131, 邦譯、同上(一五七ページ))「鑄貨準備金」(Reservfonds von Münze)(『經濟學批判』S. 119, 邦譯、同上(一四二ページ))「鑄貨の停滯的準備金」(stagnierenden Reservfonds von Münze)(『資本論』第二卷S. 346, 邦譯、同上(6)四五〇ページ)といわれる。この「鑄貨準備」は「停止させられた鑄貨」、「機能を停止した鑄貨」(『經濟學批判』S. 131, S. 119, 邦譯、同上(一五七ページ、一四二ページ))であるにすぎない。したがってそれは流通手段として機能していない。蓄藏貨幣も非流通手段としての貨幣であり、流通手段として機能しないので、非流通手段という点においては、蓄藏貨幣も「鑄貨準備」も同様である。だが、しかし両者は本質的にちがっているのである。

「鑄貨準備」は、流通の内部で全面的に発生し、鑄貨の不断の流通の条件をなすのであって、この「鑄貨準備」の形成なくしては貨幣流通は恒常的におこなわれえない。そして流通する鑄貨総量の個々の構成部分はあるときは一方の形態を、すなわち流通手段の形態を、あるときは他方の形態を、すなわち「鑄貨準備」の形態を交互にとる。だから「鑄貨準備」は、現実の流通貨幣量の一部をなしており、たとえ非流通手段としての貨幣であるとしても流通から引きあげられた、流通の外部に出た貨幣ではない。「鑄貨準備」は、鑄貨から貨幣へ一時的に転形されたものにすぎないのである。

それに対して蓄藏貨幣形態は、鑄貨から貨幣への一時的転形ではなく、W—G—Wが中断されW—GにつづくG—Wによる補足が阻止され、W—Gが孤立化され、Gが流通から引きあげられて固定化されることによって与えられる。「流通手段が蓄藏貨幣に転形したのは、流通過程が第一段階で中断されたからであり、商品の転形された姿態が流通から引きあげられたからである」(『資本論』第一卷 S. 142, 邦譯, 同上(1)二六七ページ、傍点—引用者)。(註)

(註) 「貨幣は、商品をあとから買うことなしに賣ることに
より、流通から引あげられて、蓄藏貨幣とし積立てられる」
(『資本論』第二卷 S. 486, 邦譯, 同上(7)六四六ページ、傍
点—引用者)。

したがって蓄藏貨幣は、流通界には存在せず、流通貨幣量の

構成部分ではなく、その外部に存在し流通貨幣量の増減を調節するプールとして機能するのである。両者の区別の基礎は、流通から引きあげられているかどうかという点にある。

「鑄貨準備」は、上述のごとく流通界に存し鑄貨の不断の流通の条件をなすものであり、蓄藏貨幣は、流通界の外部に引きあげられた貨幣である。鑄貨の蓄藏貨幣への転形は、単なるW—G—Wの中断、いかえればW—GにつづいてG—Wの補足が阻止されたという規定のみでは不充分で、W—G—Wの中断によりGが流通から引きあげられていなければならぬのである。このように、「鑄貨準備」と蓄藏貨幣とは、本質的にちがっている。前にも述べたごとくマルクスも「蓄藏貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」というている。それにもかかわらず、

マルクスは『資本論』の第一卷第一篇三章第三節(4)では、「鑄貨準備」という流通手段と区別して一つの貨幣形態をとりあげていないのである。そのみでなく、われわれを困惑せしめることがある。というのは同じ意味の文章から出発して一方では「鑄貨準備」を説明し、他方では貨幣蓄藏を説明しているということである。

すなわち『経済学批判』では、「各人は、彼が生産する単一の商品の販売者であるが、しかし彼が社会的生存のために必要とする他のすべての商品の購買者でもある。販売者としての彼の登場は、彼の商品がその生産のために必要とする労働時間に依存するのに、購買者としての彼の登場は、生活諸欲望の不断の

更新によって制約されている。販売することなしに購買するためには、彼は購買することなしに販売してなければならぬ。実際、流通W—G—Wは、それが同時に販売と購買との分離の不断の過程であるかぎりだけ、販売と購買との過程のうへでの統一である。貨幣が铸貨としてたえず流通するためには、铸貨はたえず貨幣に凝結しなければならぬ」(S. 118~9, 邦譯、同上141—142ページ) といつて「铸貨準備」を説明している。他方『資本論』では、「商品生産が一そう發展するにつれて、商品生産者は、いずれも、諸物の神経たる『社会的担保物』を確保しなければならぬ。彼の欲望はたえずくり返して起つて、他人の商品をたえず購買することを命ずるが、他方、彼自身の商品の生産および販売は時間を要し、また偶然に依存している。販売することなしに購買するためには、彼はあらかじめ、購買することなしに販売しておらねばならぬ」(第一卷S. 186, 邦譯、同上(1)260ページ) といつて「かくして交易上のすべての点に種々様々な範圍の金銀の蓄藏が成立する」ということを説明している。

『経済学批判』にも『資本論』にも、いま引用したところからわかるようにのべられている。しかるにそれ以下の文章は一方では「铸貨準備」、他方では蓄藏貨幣と、ことなつた貨幣形態を説明しているのである。

さてこのことをいかに理解すればよいのであろうか。この理解は、『経済学批判』および『資本論』でのべられている文章の意味内容を考察することによつてえられるように考へる。たとえば、日常用いる食糧や飲物、あるいは比較的安価な諸商品を購入する場合を考えてみよう。商品生産者は自己の商品を販売して貨幣をえる。彼は、その貨幣をすぐさま全額他の諸商品の購買のためには使わない。一部分は数日間の食糧や飲物の購入に費やされたとしても、他の一部分は彼の手もとにとどまっている。この彼の手もとにとどまつた貨幣は、漸次彼の生活のために必要な諸商品の購入に使われるであらう。彼が、漸次このように他の諸商品を購入することができるのは、すなわち最初に商品を販売してえた貨幣の一部分を購買のために使わずに彼の手もとにとどめておいたからにはかならない。この部分の貨幣は、販売と購買との中断の結果である。だから彼がこの部分をもつて漸次必要とする彼の生活必需品を購入することができるのは、購買することなしに販売したからである。この部分については、「販売することなしに購買するためには、彼は購買することなしに販売してなければならぬ」ということができるであらう。

他方彼の欲望は、単にこのような日常用いる食糧や飲物あるいは比較的安価な諸商品にかぎられてはいないであろう。たとえば、家を建てたいという欲望あるいは高価な嗜好品や骨董品などを手に入れたいという欲望も存在しよう。ところで、これらの高価な諸商品を購入するためには、何カ月かあるいは何年か彼が商品を販売してえた貨幣の一部分を前にのべたような方法で一定期間のあいだに諸商品の購買のために用いることなくたくわえておかねばならない。そして一定金額に達してはじめて購買が実現する。ここでもまた「販売することなしに購買するためには、彼は購買することなしに販売していなければならぬ」ということがいえるであろう。

このようにみてみると、『経済学批判』における「鑄貨準備」についての文章、そして『資本論』における蓄藏貨幣についての文章は、貨幣が一時的、暫時的に商品生産者の手もとにとどまる場合にも、また貨幣が一時的、暫時的なものとしてでなく流通から引きあげられた場合にも、どちらにも妥当する。妥当はするが、しかしこの二つの例における貨幣の形態規定は本質的にちがっている。すなわち、はじめの例における貨幣は、一時的、暫時的に商品生産者の手もとにとどまっている「停止させられた鑄貨」であつて、「鑄貨準備」である。したがつて、この場合の貨幣は流通界に存在しており流通貨幣量の構成部分である。しかるにあとの例における貨幣は、流通から引きあげられた貨幣、すなわち蓄藏貨幣であつて、流通の外部にあつて、こ

の場合購買手段の準備金としての機能をはたしているのである。ここでついでに「鑄貨準備」と蓄藏貨幣の一つの機能としての購買手段の準備金との区別をのべておこう。

「蓄藏貨幣の諸機能は、一部は、国内的流通^{II}および支払手段としての貨幣の機能から生じ、一部は、世界貨幣としての機能から生ずる」(『資本論』第一卷 S. 150, 邦譯、同上(1)二八〇ページ)。(註)

(註) マルクスは、蓄藏貨幣の機能については、まず金屬流通そのものの内部において貨幣流通を商品流通に順應せしめて流通貨幣量を調節するという機能を第三節(a)の最後へのべてゐる。それからまた、第三卷へいって、銀行券に対する兌換の準備金として、また預金の拂出のための準備金として機能するということを追記している。これら銀行券の兌換、預金の拂出のための準備金としての機能は、單なる貨幣としての諸機能とは關係はないが、銀行の機能に關連しており、全く恣意的に蓄藏貨幣に負わせられた機能である。(『資本論』第一卷 S. 152, 邦譯、同上(1)二八二ページ、および第三卷 S. 496, 邦譯、同上(3)六四六ページ、S. 614~5, 邦譯、同上(II)八〇一~二ページ、参照)。

蓄藏貨幣の諸機能は、貨幣の流通手段、支払手段、世界貨幣の諸機能から生ずる。すなわち流通手段の準備金としての機能 (Funktion als Reservfonds für Umlaufmittel) 支払手段の準備金としての機能 (Funktion als Reservfonds für

Zahlungsmittel) 世界貨幣の準備金としての機能 (Funktion als Reservemittel des Weltgeld) である (『資本論』第三卷 S. 496, 邦譯、同上(四六六ページ))。

流通手段の準備金としての機能は、購買手段の準備金としての機能と理解した方がよいように思う。というのは「鑄貨準備」のことを「流通手段準備金」あるいは「流通手段予備金」といっている人があり、「鑄貨準備」の機能と蓄藏貨幣の機能とを混同するおそれがあるからである。またマルクスは、この種の準備金を「Reserve von Kaufmitteln: Reservemittel von Kaufmitteln」(『資本論』第三卷 S. 347, S. 352, 邦譯、同上(四四九ページ、四五六ページ))とも使っているからである。(註)

蓄藏貨幣が、購買手段の準備金として機能することができるのは、蓄藏貨幣が、必要に応じていつでも流通に入り、流通手段としての貨幣に転化するからである。高価な諸商品を購入するために貨幣を長期にわたってたくわえているような場合の貨幣蓄藏は、貨幣を蓄藏せんがための蓄藏ではなく、高価な商品を購入せんがための蓄藏であって、それは購買手段の準備金である。かかる購買手段の準備金は、貨幣を流通から引きあげることによって形成される。他方「鑄貨準備」は、さきにもみたごとく、それは流通から引きあげられた貨幣ではなく、流通界に存在し、そして貨幣流通を恒常的におこなわせるための貨幣流通の単なる技術的な契機にもとづいている。マルクスは、他のところで「鑄貨準備」を「直接流通貨幣の直接的準備金」

(unmittelbarer Reservemittel des direkt zirkulierenden Geldes)ともいっている。したがって「鑄貨準備」と購買手段の準備金とを混同することはできないのである。両者を区別する規定は、貨幣が流通から引きあげられているかどうかというところにある。そしてまた、両者の目的も役割もまったくことなっているのである。

(註) 竹村氏前掲論文

「ここで概念の混同を防ぐため、上述の蓄藏貨幣と鑄貨準備金とを區別しておきたい。W—G—Wにおよび、Gの一部分は流通手段として流通し、他の部分は長かれ短かれ流通界にあって休息する。この休息部分はつねに流通手段準備金として滞留することを余儀なくされる。マルクスは、「鑄貨準備金」または「鑄貨準備」とよんでいる」(九七ページ、傍点—引用者)。

友岡久雄著「貨幣、資本、信用」(一〇七ページ、参照)。以上みてきたごとく『資本論』と『経済学批判』とのなかで、同じような文章から出発しているからといって蓄藏貨幣と「鑄貨準備」とを同一視し、両者を混同して理解することはできない。同じような文章でも、その意味内容がちがっているのである。ローゼンベルグは、貨幣の蓄藏貨幣機能を説明してまずつぎのごとくいっている。

「この機能は、流通手段としての機能を否定し、それを制約する。蓄藏は、第一の変態W—G(商品—貨幣)が第二の変態G—

W(貨幣―商品)によって補足されなるときにはじまる。そしてこのことは、貨幣が流通手段ではなくなくなったことを意味する」と。蓄藏貨幣の形態規定は、前のべたごとく、W—G—Wが中断され、W—GにつづくG—Wによる補足が阻止され、Gが流通から引きあげられることである。鑄貨が貨幣に転形されるためには、W—G—WがW—Gで中断され、G—Wによる補足が阻止されなければならない。だがW—G—Wが中断されW—GにつづくG—Wによる補足が阻止されたからといって貨幣が蓄藏貨幣となるということはできない。この貨幣が流通から引きあげられなければならない蓄藏貨幣となることはできないのである。

ローゼンブルグは、蓄藏貨幣の形態規定を単に「第一の変態W—Gが第二の変態G—Wによって補足されない」ということのみにおいてとらえ、流通から貨幣が引きあげられるということを見過している。この形態規定の不充分さからローゼンブルグは、蓄藏貨幣と「鑄貨準備」とを同一視し、両者を混同し、蓄藏貨幣を理解しないばかりでなく「鑄貨準備」という非流通手段としての一つの貨幣形態を見過することになったのである。

ローゼンブルグは、つづいて第一に「いかなる商品生産者も通常一つの商品を生産し多くの商品消費する」から、第二に「生産および販売には一定の時間が必要である。しかるに購買は消費によって指図されている。消費は、かれが生産した商品が実現されるまで、延期するわけにはゆかぬ」から、ここに貨幣蓄藏がおこなわれるということを説明し、そして「それゆえ

に蓄藏手段としての機能は、流通手段としての機能をいわば支持し、制約する。貨幣が鑄貨として、流通手段として絶え間なく運動するには、――それは種々の商品生産者においてさまざまに量で蓄藏されていなければならない。この矛盾は、運動する貨幣の流れとあいならんで、貨幣の準備が存在しているということ、そして絶えず一方から他方への流入が行われているということによって解決される」とのべている。そしてさらにこの蓄藏をローゼンブルグは、「商品流通の正常的發展の条件たる蓄藏」あるいは「流動する蓄藏」と名付け、「多かれ少なかれ長期にわたって流通からすっかり脱出する貨幣蓄藏の意味の蓄藏」とを区別しなければならないことを強調し、「流動する蓄藏」については、マルクスは『経済学批判』のなかでアダム・スミスを引用してつぎのごとくかいているとして『経済学批判』からつぎの文章を引用している。「どの商品所有者も、彼の販売する特殊な商品とならんで、それで彼が購買するある特定額の一般の商品をつねにもちあわせていなければならない」(以上ローゼンブルグ『資本論註解』梅村譯、第一卷第一分冊二二二―二二四ページ、『經濟学批判』からの引用は、S. 110, 邦譯、同上―一四二ページ)。

ローゼンブルグが「商品流通の正常的發展の条件たる蓄藏」あるいは「流動する蓄藏」といっているのは、実は「鑄貨準備」であって蓄藏貨幣ではないのである。「流動する蓄藏」を『経済学批判』より引用して説明しているが、その引用された文章のと

ころは、マルクスが「鑄貨準備」を取扱っている箇所であつて蓄藏貨幣についてのべている箇所ではない。そしてまた「貨幣が鑄貨として、流通手段として、絶え間なく運動するには」鑄貨が蓄藏貨幣に転形されていなければならないのではなく、鑄貨が「鑄貨準備」となつて停滯していなければならないのである。(註1)

「商品流通の正常的發展の条件たる蓄藏」とローゼンベルグがいつているのは、いままたごとく実は「鑄貨準備」なのであるから、流通から引きあげられていないで流通界に存在しているということはあきらかである。ところでローゼンベルグは、この商品流通の「正常的發展の条件たる蓄藏」と「多かれ少なかれ長期にわたつて流通からすつかり脱出する貨幣蓄藏の意味の蓄藏」とを区別しなければならぬとのべているのであるが、これはおそらくマルクスが「蓄藏貨幣と鑄貨準備と混同してはならぬ」(『經濟學批判』S. 131, 邦譯、同上二五七ページ)といつていることを説明するつもりであつたのであろう。しかし「鑄貨準備」を「商品流通の正常的發展の条件たる蓄藏」と理解するのであるからマルクスのいつていることを正しく説明することはできない。

またローゼンベルグは、ここで流通から引きあげられなくとも貨幣蓄藏がおこなわれるということを「流通からすつかり脱出する貨幣蓄藏の意味の蓄藏」と對比してのべているが、このことは、蓄藏貨幣の形態規定を単にW—G—Wの中断、W—GがG—Wによつて補足されないという規定のみにおいてとらえ、

流通から引きあげられねばならない、という点を理解しなかつた蓄藏貨幣の形態規定の不充足の当然の帰結であらう。つまりローゼンベルグは、蓄藏貨幣の形態規定を正しく理解していなかったために、蓄藏貨幣と「鑄貨準備」とを混同し、同一視し、両者を正しく理解することができなかったのである。(註2)

(註1)「貨幣が鑄貨としてたえず流動するためには、鑄貨はたえず貨幣に凝結しなければならぬ。鑄貨の不斷の流通は、鑄貨が流通の内部で全面的に發生するとともに流通を制約する鑄貨準備となつて、大なり小なりの割合で不斷に停滯することを條件としており、この鑄貨準備の形成、配分、解消、再形成はつねに交替し、その定在はたえず消滅し、その消滅はたえず定在する」(『經濟學批判』S. 119, 邦譯、同上二四二ページ)。

(註2) 岡橋保著『貨幣論』

「販賣と購買との繼起は切斷され、これを媒介する貨幣のたえまなき流通も中斷されて、ここに貨幣は滯留を余儀なくされる。貨幣は、交換手段として流通することをやめ、不動の貨幣として蓄藏貨幣という規定をうけとる」(四二二ページ傍点引用者)。

「蓄藏貨幣と休息貨幣とを區別するものは、交換手段をやめ、かかる規定をぬぎすてた貨幣という貨幣の形態規定における差異であつて、時間的な技術的な規定ではならぬ」(四

五ページ、傍點—引用者)。

宮川實著『資本論研究』(10)

「第一に、蓄藏貨幣は商品流通から必然的に発生する。金は、商品がその變態過程を中斷して金の蛹たる形態にとどまるとき、貨幣として流通手段から分離する。この現象は販賣がおこなわれて購買がこれにつづかない場合には、つねに生ずる。流通手段(鑄貨)そのものは、その流通が中斷されるやいなや貨幣となる。自分の商品を賣つて鑄貨を手に入れた販賣者の手であつては、鑄貨は貨幣であつて鑄貨ではない。それは彼の手を去るやいなやまた鑄貨となる。だから金は、同時に流通手段でありかつ蓄藏貨幣であることはできない。ひとつの機能は他の機能を否定する。しかし第二に、發展した商品生産のもとでは、貨幣が流通手段としてたえず流通するためには、商品生産者たちは蓄藏貨幣をもたざるをえないのである。(一)すでに述べたように、流通W—G—Wにおける第二の環G—Wは、同時におこなわれないで時間的に繼起しておこなわれる一系列の購買に分裂するのであるから、Gの一部分は鑄貨として流通するの、他の部分は貨幣として休息する。貨幣は、じつさいこの場合には、ただ一時流通を停止した鑄貨であるにすぎない。そして、流通鑄貨量の個々の構成部分は、つねにかわるがわる、あるいは一方の形態において、あるいは他の形態において現われる。ここでは、蓄藏貨幣は、鑄貨流

通の技術的契機であるにすぎない。(二)商品の生産と販賣とは一定の時間が必要である。しかし購買の方は消費に制約され、その消費は自分の商品が生産され販賣されるまで延期することはできぬ。そのため商品生産者たちは、賣らないで買ふことができねばならない。ところが賣らずに買ひうるためには、商品所有者たちは蓄藏貨幣をもつていなければならぬ。『じつさい流通W—G—Wは、それが同時に購買と販賣との分離の不斷の過程であるかぎりでのみ、購買と販賣との過程的統一であるにすぎぬ。貨幣を鑄貨としてたえず流通せしめるためには鑄貨はたえず貨幣に凝結しなければならぬ。鑄貨の不斷の流通は、鑄貨豫備金の形態における鑄貨のたえず停滯—あるいは大きいあるいは小さい割合の停滯—によって制約されているのである。』(『經濟學批判』S. 119.)(六一七—八ページ、傍點—引用者)。

友岡久雄著『貨幣、資本、信用』

「商品の対立的な轉形過程即ち販賣(W—G)と購買(G—W)とが繼續的に遂げられる限り、貨幣は單に流通手段として機能しているに過ぎない。然るに商品の轉形過程が中斷され、販賣されるだけで購買がなわれなければ、貨幣はここに蛹化して靜止し、流通手段は轉じて蓄藏手段(退藏貨幣)となる。元來商品の流通W—G—Wは、商品の貨幣への轉形と貨幣の商品への転形、販賣と購買という二つの獨立なる行爲の過程的統一であつて、販賣と購買とは時間

的に多かれ少なかれ分離している。「實際において流通W
—G—Wは、それが同時に絶えず販賣と購買とに分離する
が故に販賣と購買との過程的統一である」。従つて、その分
離の間は貨幣は滞留して流通手段たる機能を停止し、一時
的に蓄藏手段として機能せねばならない。のみならず購買
(G—W)は、販賣(W—G)が商品の生産条件その他に制約
せられるに對して、購買者の不斷に更新する生活欲望によ
つて制約せられ、従つて時間的に繰起する一定系列の購買
に分裂するが故に、流通手段の一定部分は、不斷に流通手
段豫備金(鑄貨準備—引用者)の形態における滞留が余
儀なくされる。従つて流通手段としての貨幣も、不斷に流
通するためには、代わる代わる流通を停止して流通手段か
ら蓄藏手段に轉化せざるを得ない。併しかかる流通手段の
蓄藏手段への轉化は、實は『貨幣流通それ自体の單なる技
術的契機』に外ならない(一〇七ページ、傍点—引用者)。
他方で「貨幣蓄藏はこれを鑄貨準備或は流通手段として
の準備、購買準備と混同してはならない、鑄貨準備は、
それ自体が常に存在している貨幣總量の一部をなしてい
るが、蓄藏貨幣と流通手段との間の動的關係は、その貨幣
總量の減少或は増加を前提としているのである(一一八ペ
ージ)とのべられているが。

宇野弘藏著『資本論入門』(1)(社會科學研究叢書 白晝書院
昭和三年)

蓄藏貨幣論

「貨幣の蓄藏或いは退藏といわれる現象は、最初は單にW
—G—WがW—Gで中斷せられ、貨幣が所謂鑄貨準備とし
て蓄えられ、購買を任意の時まで延期することから
起るのである」(一〇〇ページ、傍点—引用者)。

四

前節において、われわれは蓄藏貨幣の形態規定を考察した。
つまり蓄藏貨幣とは、W—G—Wの中斷によつてW—Gにつづ
くG—Wの補足が阻止され、そして流通から引きあげられた貨
幣がとる貨幣形態なのである。このG—Wによる引きつづいて
の補足が阻止されるときW—Gの結果であるGが流通から引き
あげられて蓄藏貨幣となるといふ、貨幣蓄藏そのものの過程に
ついては、すべての商品生産に共通している。しかしながら蓄
藏貨幣といつても單純な商品流通もにおける蓄藏貨幣と資本
制生産のものにおける蓄藏貨幣とは、その性格、役割、目的が
あいことなっているのである。

そこで本節においては、まず單純な商品流通のもとにおいて
の蓄藏貨幣が、いかなる特徴的性格を有し、いかなる役割を演
じ、いかなる目的をもっているかということ考察してみよう
と思う。

そしてまた第二節で問題として提起した、蓄藏貨幣が、金の
代理者によつてはたすことができるかどうかという問題と関連

して単純な商品流通における蓄藏貨幣を考察してみようと思う。

第二節の冒頭にも述べたごとく、『資本論』第一巻第一篇第三章および『経済学批判』第三章では、単純な商品流通の領域内における貨幣が考察されている。したがってここでの考察は、単純な商品流通の領域内に限定されているわけである。考察領域をここに限定しうる理由は、マルクス自身のつぎの言葉によって理解することができるであろう。「もし吾々が貨幣を考察するならば、それは、商品交換の特定高度を前提とする。特殊な貨幣諸形態——単なる商品等価、または流通手段、または支払手段・蓄藏貨幣・および世界貨幣——は、そのいずれかの機能の相異なる範囲と相対的優越とに依りて、社会的生産過程の極めて相異なる諸段階を示唆する。とはいえ、経験に徴すれば、これらすべての貨幣形態が形成されるためには、商品流通の比較的微弱な発展で充分である」(『資本論』第一巻第二篇第四章 S. 107, 邦譯、同上(2)三九ページ)。

だから『資本論』第一巻第一篇第三章第三節(a)および『経済学批判』第二章第三節(a)において考察されている蓄藏貨幣もまた、当然かかる考察領域に限定されているわけである。ここでの貨幣蓄藏は、単純な商品流通の領域内での貨幣蓄藏、「商品流通の比較的微弱な発展」のもとにおける貨幣蓄藏である。

貨幣の蓄藏は、商品流通がはじまるとともに発生し、商品生

産の発展とともにその「必要と熱情」は発展する。貨幣蓄藏は前節でみたごとく根本的にはW—G—Wの中断、W—GにつづくG—Wの補足の阻止、すなわち購買をもたない商品生産者の一方的な商品販売の反復を条件としており、流通から反復的に貨幣を引きあげることによっておこなわれる。だから蓄藏貨幣の形成とは、一方的な商品販売によって貨幣を流通から引きあげ蓄藏することである。このことは、すべての商品流通に共通である。しかし単純な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣と資本制生産のもとにおけるそれとは種々の点においてことなっているのである。

致富欲の対象は貨幣である。貨幣は致富欲の唯一の対象である。「金こそ富が抽象的、社会的な富として固定される最初の形態である」(『経済学批判』S. 120, 邦譯、同上二四三ページ)とともにまた最終の完全なる形態である。なぜ金が抽象的、社会的な富であるのかという点、金は唯一の本来の貨幣商品であり、「交換価値の唯一十全な定在」であるからである。

さて、単純な商品流通のもとにおける貨幣蓄藏の特徵的性格は、この「富の社会的表現」としての、貨幣を蓄藏せんがための貨幣蓄藏であるという点にあるのである。富としての富の蓄藏は、単純な商品流通のもとでのみ支配的におこなわれ、そしてそれは貨幣蓄藏の形態においてのみ可能なのである。ここでは富の蓄藏、すなわち貨幣の蓄藏そのものが自己目的となつているのである。したがって、商品生産者は商品を販売してえた貨

幣を他の商品の購入あるいは支払の目的のためにではなく、貨幣そのものを目的として蓄藏する。彼の販売行為は、購買あるいは支払のためではなく、貨幣を固持せんがための行為である。商品の形態変換は、貨幣を媒介としての材料変換ではなく、貨幣そのものを自己目的とする変換である。かくして貨幣は蓄藏貨幣に化石し、商品の販売者は貨幣蓄藏者となる。貨幣蓄藏者とは、本来このように貨幣を自己目的として蓄藏する者である。

マルクスは、『資本論』では商品生産の発展にもとずいて貨幣蓄藏を考察している。まず商品流通の端初においてはどうか。この段階においては、販売せられる商品は、剰余生産物のみである。だからこの剰余生産物のみが貨幣に転形される。この段階における貨幣蓄藏をマルクスは「素朴な貨幣蓄藏形態」とよんでいる。「素朴な貨幣蓄藏形態」といわれるのは、貨幣蓄藏がまったく致富の熱情からであり、「富の社会的表現」としての貨幣蓄藏であるからである。そしてこの意味の貨幣蓄藏が、単純な商品流通のもとにおける貨幣蓄藏の特徴的性格なのである。

マルクスは、続いて「商品生産が一そう発展するにつれて」といって、貨幣蓄藏の「必要」をのべている。その文章は一九七ページで引用したところのものであるが、ここで「商品生産の『一そうの発展』』といっているのは、決して高度の商品生産の発展を意味するものではない。「一そう発展」といっているのは、まさにマルクスがのべた「商品流通の端初」という言葉に

対してである。われわれはいま、単純な商品流通の領域内における貨幣蓄藏を考察しているのだということを忘れてはならない。

さて単に商品の貨幣への転形が剰余生産物にかぎられなくなると、商品生産者の欲望と商品の生産および販売に要する時間との矛盾によって、貨幣を蓄藏していなければならないという「必要」は当然におこってくる。だが、かかる形態の貨幣蓄藏は、単純な商品流通のもとにおいては、従属的な形態にとどまっております。決して単純な商品流通のもとにおける貨幣蓄藏の一般的なあるいは支配的な、したがって単純な商品流通のもとにおける貨幣蓄藏を特徴づけるような形態ではない。同じく第三節の(b)支払手段のところでも『資本論』、『経済学批判』でのべていることからわかるように、単純な商品流通のもとにおける貨幣蓄藏は、「自立的な致富形態としての貨幣蓄藏」であり、「致富の意味をもつところの抽象的形態における貨幣蓄藏」であり、「素朴な貨幣蓄藏形態」なのである。

マルクスは、つぎのごとくいっている。

「自立的な致富形態としての貨幣蓄藏は、市民的社会的進展につれて減少するが、これに反して、支払手段の準備金の形態での貨幣蓄藏は、市民的社会的進展につれて増大する」(『資本論』第一卷S. 148, 邦譯、同上(二七六ページ))。

「致富の意味をもつところの抽象的形態における貨幣蓄藏は、ブルジョアの生産の発展とともに減少するのに、交換過程によ

って直接に必要とされる貨幣蓄藏は、増加する」(『經濟學批判』S. 142; 邦譯、同上「十〇ページ」)。

この二つの引用文で、市民的社會の發展とともに「素朴な貨幣蓄藏」すなわち自己目的としての貨幣蓄藏が減少していくということがのべられている。しかしこの形態の貨幣蓄藏は、完全に消滅してしまうものではない。激変期においては、發展した市民的社會のもとにおいても「蓄藏貨幣としての貨幣の埋藏」がおこなわれる。(註)

(註) 「社會的質料變換が震撼させられるときには、發展したブルジョア社會においてさえも、蓄藏貨幣としての貨幣の埋藏がおこなわれる」(『經濟學批判』S. 124-5; 邦譯、同上「四九ページ」)。

また蓄藏貨幣は、貨幣商品金の蓄藏による直接的形態とならんで、金製の裝飾品などの審美的形態においてもおこなわれるが、この審美的形態における蓄藏貨幣は、市民的社會のもとにおいてはむしろ増大する。(註)

(註) 「蓄藏貨幣の直接的形態と並び行われるものは、その審美的形態、すなわち金製品および銀製品の所有である。かかる所有は市民的社會の富とともに増大する。……かくして一面では、金銀に対するたえず擴大される市場がそれらの貨幣諸機能から独立して形成され、他面では特に社會的疾風時代に流出するような、貨幣の潜在的な供給源泉が形成される」(『資本論』第一卷S. 130; 邦譯、同上「二六

四ページ)。

このように商品生産者の欲望と商品の生産および販売に要する時間との矛盾による「必要」から貨幣を蓄藏するという形態の貨幣蓄藏は、単純な商品流通のもとにおいては從屬的な形態にとどまっているのである。したがって単純な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣を特徴づける一般的な、あるいは支配的な形態ではない。単純な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣の特徴的性質は、富の蓄藏としての、「自立的な致富形態として」の蓄藏貨幣なのである。

このような「自立的な致富形態としての貨幣蓄藏」は、単純な商品生産のもとにおいては、商品の生産をおしすすめる。なぜなら、貨幣の蓄藏は、より多くの商品を生産し販売することによって可能であるからである。他方では貨幣の蓄藏は、購買をできるかぎり少なくすることによって可能である。だから、貨幣蓄藏者にとって、勤勉が貨幣蓄藏の積極的条件となり、節約、禁欲がその消極的条件となる。かくして、貨幣蓄藏者の致富欲、貪欲は、彼を禁欲主義者たらしめるのである。(註)

(註) 「勤勉・節約および禁欲が、彼の主徳をなし、多く販賣し、少なく購買することが彼の經濟學の總體」(『資本論』第一卷S. 130; 邦譯、同上「二六三ページ」)をなしているのである。

商品流通がさらに拡大するとともに貨幣の力は増大し、ますます黄金欲が起ってくる。それは「交換価値の唯一十全な存在」

に対する欲望であり、抽象的、一般的、社会的富に対する欲望である。貨幣の所有者は権力の所有者になる。「金は驚歎すべき物である！それを有する人は、彼の望むすべてのものの主人である。金をもってすれば靈魂を天国に行かせることもできる」(ロアンブス)〔『資本論』第一卷S.137,邦譯、同上(1)二六〇ページ〕。

單純な商品流通のもとにおける貨幣蓄藏は、いままでごとく自己目的としての貨幣蓄藏であつてそれは富の蓄藏という意味の貨幣蓄藏である。したがつて、その目的は富の蓄藏であり、その役割は単にかぎられた範圍においてのみ種々の經濟的な機能をはたすにすぎない。そしてこの「自立的な致富形態としての貨幣蓄藏」は、それ自身、価値をもち、「交換価値の唯一十全な存在」たる金においてのみ可能なのである。この意味の蓄藏貨幣は、貨幣商品たる金の現身においてのみはたすことができるのである。この意味の貨幣蓄藏は、金においてのみおこなわれるのであつて、金の代理者においてはおこなわれない。この意味における蓄藏貨幣は貨幣商品たる現身の金である。なぜなら富としての富の蓄藏が、ここでは究極の目的であるからである。第二節で『資本論』第一卷第一章第三章第三節(a)貨幣蓄藏に入る前の短文を分析した際、金が貨幣として機能する第一の場合、すなわち金の現身で現われねばならぬ場合に属する機能がとして貨幣蓄藏および世界貨幣の二つの機能をあげ、他方金が貨幣として機能する第二の場合、すなわち金の現身でも、あ

るいはその代理者でもはたすことのできる場合に属する機能として、支払手段をあげ、そしてこれは、フランス語版、カウツキー版でのべられているのと一致するということをのべた。

この金が貨幣として機能する第一の場合に属する機能が、貨幣蓄藏および世界貨幣の二機能であり、第二の場合に属する機能が、支払手段ただ一つの機能であるということは、單純な商品流通のもとにおいては正しい。なぜなら問題となつた蓄藏貨幣は、單純な商品流通のもとでは、金の現身であり、貨幣蓄藏は、金の現身においてのみはたされるのであるからである。蓄藏貨幣は、後にみるが資本制生産のもとにあつては、代理者によつてもなされる。だが、しかし「自立的な致富形態としての」蓄藏貨幣は、代理者によつては、はたすことはできないのである。この場合には、それ自身、価値をもつ金の現身が要求されるのである。だから貨幣蓄藏が、代理者によつてもはたされるといつても、それはすべての貨幣蓄藏に妥当する規定ではない。「自立的な致富形態」としての蓄藏貨幣は、金の現身である。この点からも單純な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣と資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の目的、役割、性格等をはっきり區別して考察してみる必要があるであらう。(未完)